

佐久市埋蔵文化財課調査報告書第39集

平賀中屋敷遺跡群

NAKA YA SHIKI

中屋敷遺跡

長野県佐久市平賀中屋敷遺跡発掘調査報告書

1995. 3

佐久建設事務所

佐久市教育委員会

平賀・中屋敷遺跡の調査について



中屋敷遺跡全景（国道254号方面をのぞむ）

今回発掘調査を行なった中屋敷遺跡は、幅の狭い小規模な調査でした。しかし滑津川より南の佐久市では初めて行なわれた遺跡の発掘となりました。

遺跡からは狭い範囲の調査にもかかわらず、平安時代後期頃（およそ1000年前）の人々が生活した「堅穴住居」跡が4軒と「土坑」と呼ばれる素掘りの穴が3ヶ所発見されました。

のことから、平賀地区はたいへん遺跡の多い場所であることがわかります。調査された住居や土坑の中からは、当時使われた土器がダンボール1箱ほど発見されました。



遺跡出土の灰釉陶器

遺跡出土の土器

発見された土器の中には「灰釉陶器」と呼ばれる白く硬いやきものがありました。これらは現在の岐阜県や愛知県で焼かれ運ばれてきたものです。当時の交通手段は乏しく遠い佐久までの運搬はたいへんなことであったと思われます。



例　　言

1. 本書は、長野県佐久建設事務所が行なう佐久市北耕地における交通安全事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2. 調査委託者 佐久建設事務所

3. 調査受託者 佐久市教育委員会

4. 発掘調査所在地籍

平賀中屋敷遺跡群 中屋敷遺跡 (H N Y)

佐久市大字平賀 北耕地5365-2

5. 調査期間及び面積

発掘調査 平成4年9月12日～平成4年9月22日

整理調査 平成4年12月5日～平成5年3月31日

面　積 139.5m²

6. 本書の執筆・編集は、富沢が行なった。

7. 本書及び中屋敷遺跡出土遺物等の総ての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　　例

1. 掘図の縮尺は次のとおりである。

遺構 1/80 カマド 1/60 土坑 1/40 遺物 1/4

2. 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」として示した。

3. 土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。

4. 遺物掘図番号と遺物写真番号および遺物観察表番号は一致する。

5. 掘図中におけるスクリーントーンは以下のことをしめす。

〈遺構〉



地山断面



かまど範囲・焼土範囲

〈遺物〉



黒色処理



施種範囲



灰釉断面



鉄器断面

目 次

平賀・中屋敷遺跡の調査について

例言・凡例

第Ⅰ章 発掘調査の経緯 1

第1節 調査の経緯と経過 1

第2節 調査の体制 2

第3節 調査日誌 2

第Ⅱ章 遺跡の環境 3

第1節 自然的環境 3

第2節 歴史的環境 3

第Ⅲ章 遺跡の基本層序 6

第Ⅳ章 遺構と遺物 7

第1節 坪穴住居址 7

(1) 1号住居址 7

(2) 2号住居址 7

(3) 3号住居址 8

(4) 4号住居址 9

第2節 土坑 12

(1) 1号土坑 12

(2) 2号土坑 12

(3) 3号土坑 13

第Ⅴ章 調査のまとめ 15

写真図版

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査の経緯と経過

中屋敷遺跡が存在する中屋敷遺跡群は、佐久市大字平賀地籍に所在し、物見山（1375m）・熊倉峯（1234m）・兜岩山（1368m）に源をはっする滑津川の南側、標高688m内外を測る扇状地先端部に位置する。滑津川をはさみ北方約500mの自然堤防上には、古墳時代後期の大集落約300軒が調査された樋村遺跡が存在する。

今回、佐久建設事務所が実施する県道香坂中込線の交通安全事業にともない、幅2mの歩道を設置する事となった。その為、佐久建設事務所より佐久市教育委員会に当地籍においての遺跡有無の照会があった。教育委員会では中屋敷遺跡群が所在するため、まず試掘調査を行う事とした。

試掘調査では、今回の本調査地をふくめ幅約1.5m・長さ90mのトレーンチ調査を行った。その結果、北側部分においては遺構・遺物ともに確認されず、南側46m間（本調査範囲）において堅穴住居址1軒の存在と土師器片が検出された。よって、佐久建設事務所と当教育委員会において協議を行った結果、設計変更は難しく遺跡の破壊が余儀なくなり、佐久市教育委員会埋蔵文化財課において記録保存を目的とする本調査が実施されるはこびとなつた。



第1図 中屋敷遺跡の位置図 (1 : 50000)

第2節 調査体制

佐久市教育委員会埋蔵文化財課

教育長 大井 季夫

教育次長 奥原 秀雄

埋蔵文化財課長 戸塚 満

管理係長 谷津 恭子

埋蔵文化財係長 草間 芳行

管理係 田村 和広

埋蔵文化財係 林 幸彦 三石 宗一 須藤 隆司

小林 真寿 羽毛田卓也 富沢 一明

上原 学

調査担当者 富沢 一明

調査主任 佐々木宗昭

調査副主任 堀 益子

調査員 遠藤しづか 並木ことみ 小林よしみ

成沢 富子 金森 治代 橋詰 勝子

橋詰けさよ 橋詰 信子 堀篠 因

真島 保子 桜井 牧子 市川チイ子

岩下 吉代 岩下とも子 岩下 文子

工藤しづ子 武田 千里 武田まつ子

堀込 成子 離井 健

第3節 調査日誌

1994年9月2日 試掘調査

9月12日 本調査開始 重機により表土剥ぎを行う。

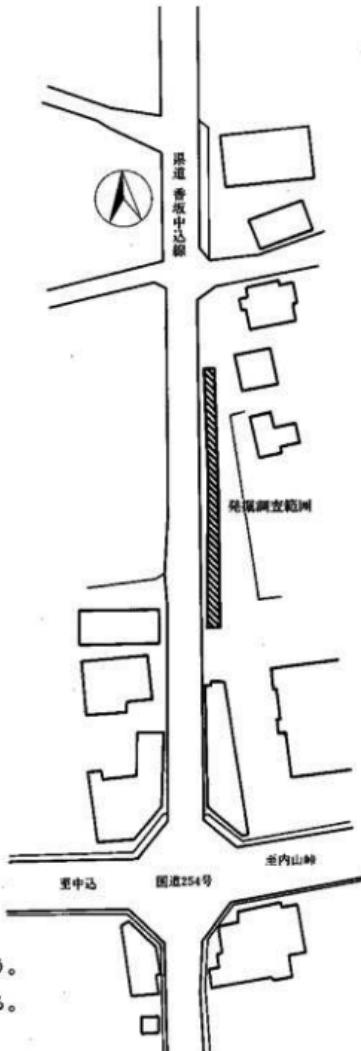
9月14日 遺構の検出・遺構の掘り下げを開始する。

~21日 遺構実測・写真撮影等を行う。

9月22日 機材を撤収し調査を終了する。

1994年12月5日 報告書作成作業開始

3月31日 報告書を刊行する。



第2図 中屋敷遺跡調査範囲図

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然的環境

中屋敷遺跡が所在する佐久市平賀地籍は、巨視的に見ると佐久平の南東よりに位置し、八風山・物見山・荒船山などの山地が千曲川に迫った一支脈先端に位置する。現遺跡地形は、北に滑津川が西流し、南には田子川と千曲川が南流しており、西側に緩く傾斜する段丘状を呈している。この段丘は、河川によって形成された扇状地が再び滑津川の開析によって段丘化したものである。段丘中心には現在国道254号線が通過しており、道路沿いには集落が散在し、その後背地には水田が広がっている。

第2節 歴史的環境

本遺跡が所在する平賀地籍及びその周辺の志賀・瀬戸・内山地区には、南面に開けた山腹、段丘上、低地に数多くの遺跡が散在する。これらの遺跡を時代別に概観したい。

まず、先土器時代の遺跡は未だ発見されていない。続く縄文時代の遺跡としては、平成2年度より2年間調査された寄山・勝負沢・中条峯遺跡（256・337）がある。本遺跡からは縄文前期から中期にかけての集落約120軒や多数の土坑が調査され、縄文中期中葉から後葉を主体とする多量の土器が出土している。その他に調査された遺跡はないが、上宮前遺跡（444）からは縄文後期の土器片が採集されている。

次に弥生時代は、樋村遺跡（344）で弥生中期から後期の住居址22軒と環濠と考えられる溝2本が調査されている。また、昭和57年度調査の上の台遺跡で後期の住居址2軒、昭和47年度調査の深堀遺跡（255）では中期の住居址2軒が調査されている。このほか新町遺跡（428）、久瀬添遺跡（434）など千曲川・田子川・滑津川により形成された自然堤防上に弥生時代の遺跡が点在する。

古墳時代の代表的な遺跡としては樋村遺跡（344）がある。当遺跡は縄文時代から平安時代に及ぶ複合遺跡で、特に古墳時代後期の住居址273軒が調査されている。当該期の住居址は三時期に区分されると報告されている。中でも7世紀代に比定されるⅢ期には遺跡内住居址の規模格差が広がる時期にあたり、古墳時代集落址研究において示唆にとむ結果が得られている。また、内山地区的山腹は佐久平において古墳群が最も密集する地域のひとつで、長峯古墳群（368）・寄山

古墳（262）・後家山古墳（353）などが調査されている。いずれも7、8世紀代の後期古墳群として位置づけられている。

奈良・平安時代にはいると周辺の遺跡数は増大するが、集落的には小規模なものが多くなる。柄村遺跡(344)においても14軒が検出されたにとどまっている。

鎌倉時代以降になると平賀氏の活躍が始まる。平賀氏は鎌倉幕府の御家人として近習番等をつとめ、佐久郡平賀郷はその本貫地で文安3年(1446年)大井氏に滅ぼされるまで当地を所領とした。しかし、現在残る平賀城跡(447)との直接の結びつけは疑問視する説もある。



第3図 周辺遺跡の分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

N°	遺跡名	所在地	立地	縄	弥	古	歴	中	備考
255	深堀遺跡群	瀬戸字深堀 他	台地先端	○	○	○	○	○	昭和47年調査
256	寄山遺跡群	瀬戸字菖浦澤 他	丘陵	○			○	○	平成2・3年度調査
257	中条峯城跡	瀬戸字中条峯	*					○	
258	中条古墳群	*	*			○			
262	寄山古墳	志賀字寄山5167-1	*			○			平成3年度調査
333	東千石半遺跡群	瀬戸字東千石半	低地		○	○	○		
336	中反 *	瀬戸字中反・中屋敷	*			○			
337	中条峯遺跡	瀬戸字中条峯・中条平	丘陵	○	○	○			
340	宮田 *	瀬戸字宮田	*	○	○	○			
343	開戸田 *	平賀字開戸田・後家	丘陵先端			○			
344	樋村遺跡群	平賀字樋村・上吉田・山崎	段丘	○	○	○			昭和57・58年度調査
353	後家山古墳	平賀字後家山3000	*		○				昭和49年度調査
354	東久保古墳群	平賀字東久保・開戸田	丘陵先端		○				
365	東施石 *	平賀字東施石	山腹		○				
366	月崎 *	平賀字月崎	*		○				
367	西和田 *	内山字西和田 他	*		○				
368	長峯 *	内山字長峯	*		○				昭和62年度調査
370	觀音堂古墳	内山字坪ノ内6744	丘陵先端		○				
428	新町遺跡	中込字新町	低地			○			
431	荒家 *	平賀字荒家	段丘		○	○			
432	平賀中屋敷遺跡群	平賀字中屋敷・下屋敷・上屋敷	*		○	○	○		
433	中堰遺跡	平賀字中堰	低地			○			
434	久瀬添 *	太田部字久瀬添 他	*		○	○			
435	下屋敷古墳	平賀字下屋敷5392	段丘		○				
436	上屋敷 *	平賀字上屋敷5221	*		○				
437	北谷津遺跡	平賀字北谷津・南谷津	*			○			
438	流 *	平賀字流	丘陵	○	○	○	○		
443	城平遺跡群	平賀字城平・筒井	山腹	○	○	○	○	○	
444	上官前 *	常和字上官前 他	山地	○	○	○	○		
447	平賀城跡	平賀字城平 他	山頂					○	
453	萩元古墳	平賀字萩本4551	丘陵		○				

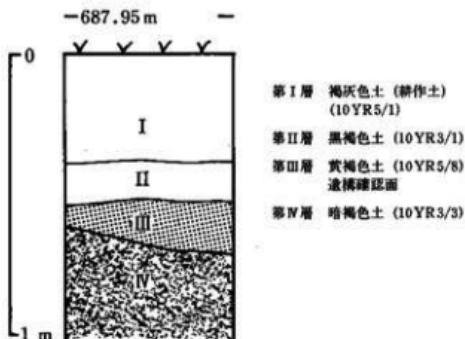
第Ⅲ章 基本層序と遺構配置

基本層序（第4図）

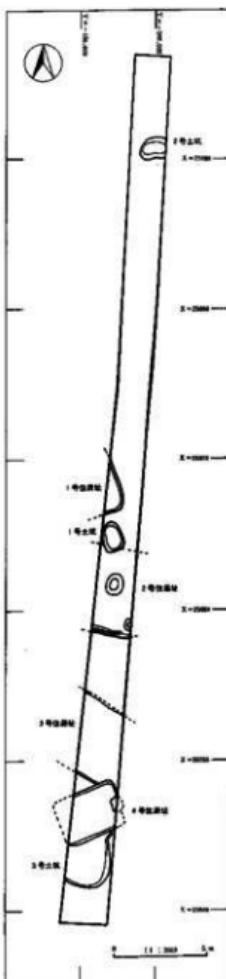
本遺跡における基本層序は、第4図に示したようにおおむね4層に分かれる。第I層は耕作土でしまりが弱く径約1cmほどの小石を多く含む。第II層は黒褐色のややしまり粘性のある層で、層中より少量の土器が検出されている。第III層は本遺跡の遺構確認面として捉えられた層で黄褐色のシルト化した土層である。しかし、本層は調査区全体に堆積しておらず、1号住居址付近より北に向かって堆積がみられ調査区北側にすすむにつれて厚く堆積していることが確認された。第IV層はこぶし大の河原石を含む堆積層で下層にすすむにしたがい砂層も部分的に含む。よって調査区南側半分は砂礫層中の遺構検出となり困難をきわめた。

遺構配置（第5図）

今回の調査範囲は、北に向い緩やかに傾斜した地形で、調査区内46m間で南北の標高差は約90cmを測る。遺構配置は、南側に竪穴住居址が近接し調査区外にも大きく広がる様相を示した。北側は土坑が1基のみで周辺部への遺構の広がりは乏しいように感じられた。



第4図 基本層序模式図



第5図 中屋敷遺跡全体図

第IV章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

1) 第1号住居址（第6図、図版一①）

本址は、調査区中央部に位置する。他の遺構との重複関係はないものの本址の大部分が西側調査区外に位置する為、調査された部分は住居址の南東コーナー部のみであった。規模は、残存値の壁高が南東コーナー部で0.11m、壁長が東壁で2.5m、南壁で1mを測る。

覆土は3層に別れ、第1層が黒褐色土（10YR2/2）で黄褐色土のブロックを含む。第2層が褐色土（10YR4/4）で南側壁付近のみ確認された。第3層が黒色土（10YR2/1）で本址の貼り床と考えられる土層である。1・2層に比べしまりがあり少量の焼土を含む。

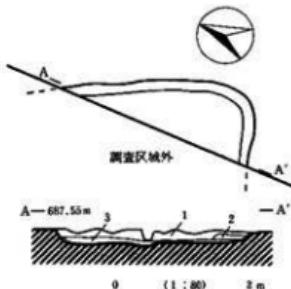
本址全体の形態は不明であるが、床面はほぼ平坦で西側調査区外に向かって硬化していることが確認された。

本住居址の出土遺物は、覆土中より土師器片・灰釉陶器片がごく少量出土したが図示できるものはない。

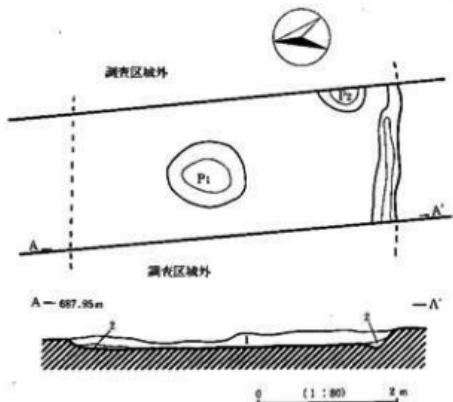
2) 第2号住居址（第7・8図、図版一②）

本址は、調査区中央部やや南寄りに位置する。位置的に1号土坑と重複するが、表土剥ぎ段階で覆土を削平してしまい新旧関係については把握できなかった。本址の検出状況は、東西両側とも調査区外となってしまった為、住居址中央部分のみの調査となった。また、本址北壁については調査区壁のセクションより推定し第7図に示した壁推定線を設定した。規模は検出値で南壁が1.9m、東西の壁は約4.6mと推定される。壁高は0.07mを測る。形態は南壁側に幅0.3m、床面からの深さ0.03mの壁溝がめぐる。

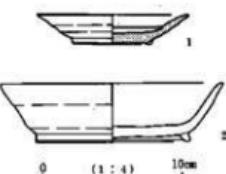
覆土は2層に分かれる。第1層が黒褐色土（10YR3/1）でしまり粘性がややあり地山Ⅲ層によく似る。第2層が褐色土（10YR4/4）で1層よりしまり粘性があり地山Ⅲ層のブロック化した土を含む。床はほぼ平坦であり地山Ⅲ層を踏み固めた様な状態であった。Pitは2ヶ所検出された。



第6図 1号住居址実測図



第7図 2号住居址実測図



第8図 2号住居址出土遺物実測図

P1は長軸1.1m、短軸0.92m、深さ0.25mを測り、覆土は黒褐色土(10YR3/1)であった。

P2は全体の約半分ほど調査されたが、規模は南北軸が0.65m、深さ0.26mを測り、覆土は黒褐色土(10YR3/1)であった。P1,2は形態から住居址柱穴とは考えにくく使用目的は不明である。

本住居址の出土遺物は、少量の土師器片と第8図に示した2点がある。1は灰釉陶器の段皿でありP1底面から0.13m浮いた状態で出土した。2は須恵器高台付壺で覆土中出土の破片と1号土坑出土の底部破片が接合関係にある。破片の残存率から本遺物は1号土坑に帰属するものとも考えらる、とすれば1と2の遺物の新旧関係から1号土坑より本址の方が新しいと考えられる。

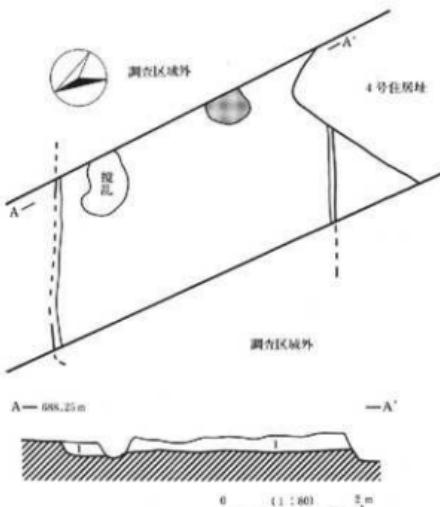
3) 3号住居址 (第9・10図、図版二①②)

本址は調査区南側に位置し、4号住居址と重複関係にある。新旧関係は本址の方が古い。規模は検出値で北壁が2.3m、東・西壁は推定で4m、壁高は0.05mを測る。住居址の主軸方位は南東と考えられる。検出状況は東・西側ともに調査区外となつた為、住居址中央部のみの調査となつた。また、北側に耕作にともなうと思われる穴によって一部破壊を受けている。

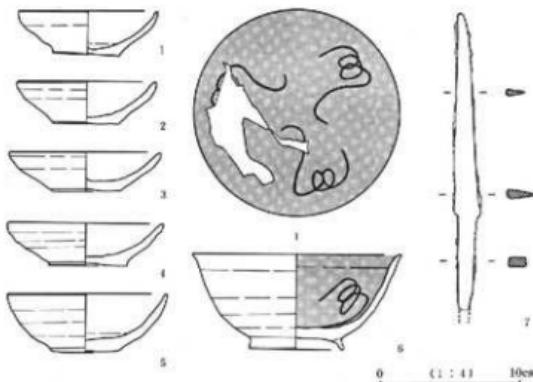
覆土は単層で、第1層が黒色土(10YR2/1)でしまり粘性があり、白色粒子・焼土粒子を含む。床はほぼ平坦で、焼土検出部分周辺がとくに硬質であった。住居址の掘り方は検出されず、地山IV層を踏み固めて使用した様子が観察された。また、東側には径0.4mほどの焼土集中区が検出された。焼土の厚みは2~3mmを測り、焼土の下には硬質の床が存在した。本址のカマドは検出されなかつたが、焼土範囲や硬質の床の広がりから住居址東側に設けられているものと予想される。本住居址の出土遺物は、土師器片・須恵器片と第10図に示した遺物がある。遺物は覆土中と床面上から出土している。

1~5は土師器壺で、1~3, 5は床面上から、4は覆土中より出土している。胎土はいずれ

もやや粗く径2~3mmの小石と径1~2mmの赤色粒子を多く含む。調整はいずれもロクロ横ナデで、底部は回転糸切り離しである。また底部立ち上がり部分には切り離し時に付いたと考えられる土粒が付着している。形態は1~4がほぼ同一であるが、5は他に比べて器高が高い。5に関しては底部の磨耗が激しく良好な観察状態ではないが高台が付く可能性がある。6は高台付きの碗であり焼土範囲南側の床面上から出土し、図版二②に示したように7の刀子の上に椀をかぶせた状態で発見されている。調整は内外面ロクロ横ナデで、内面は丁寧な黒色処理がされている。また、見込み部には3ヶ所に暗文が施されており、部分的に欠損しているがいずれも同一の表記と考えられる。7は刀子で、柄の部分は欠損しているが刃部はほぼ完形にちかい。刃部の長さは14.2cmを測る。



第9図 3号住居址実測図

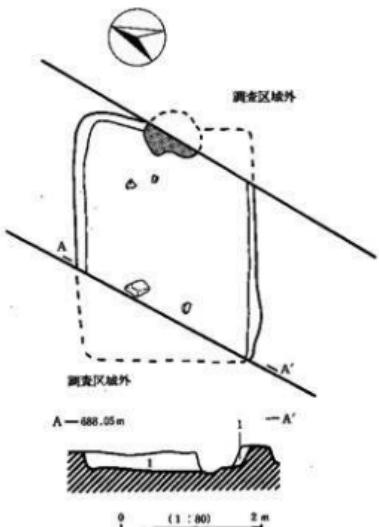


第10図 3号住居址出土遺物実測図

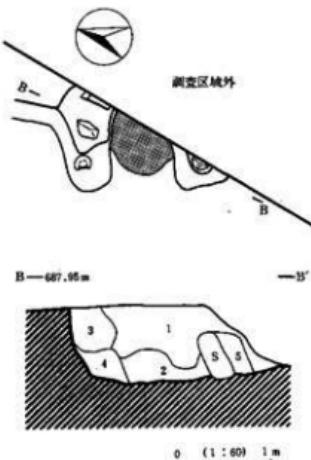
これらの遺物より本址は、10世紀後半の所産と考えられる。

4) 4号住居址 (第11・12・13図、図版三①②)

本址は調査区南側に位置し、3号住居址・3号土坑と重複関係にある。新旧関係はいずれも4号住居址の方が新しい。本址調査範囲はカマドの一部を含む住居址の中央部分のみであったが、



第11図 4号住居址実測図



第12図 4号住居址カマド実測図

北東コーナーと南東コーナーの部分的な検出により、第11図に示したように住居址範囲を推定した。推定規模は東・西壁が3.4m、南・北壁が2.6mで、壁高が北壁中央部と南壁中央部で0.15m、北西コーナーで0.13mを測る。住居址の形態は方形で、東壁中央にカマドをもち、床はほぼ平坦でカマド周辺部がとくに硬質化していた。壁は緩やかに立ち上がるが、地山IV層に掘り込まれている為もろく崩れやすい。Pit・壁溝等は検出されなかった。覆土は単層で、第1層が黒褐色土(10YR3/1)でしまり粘性がややあり、焼土・炭化物を微量含む。

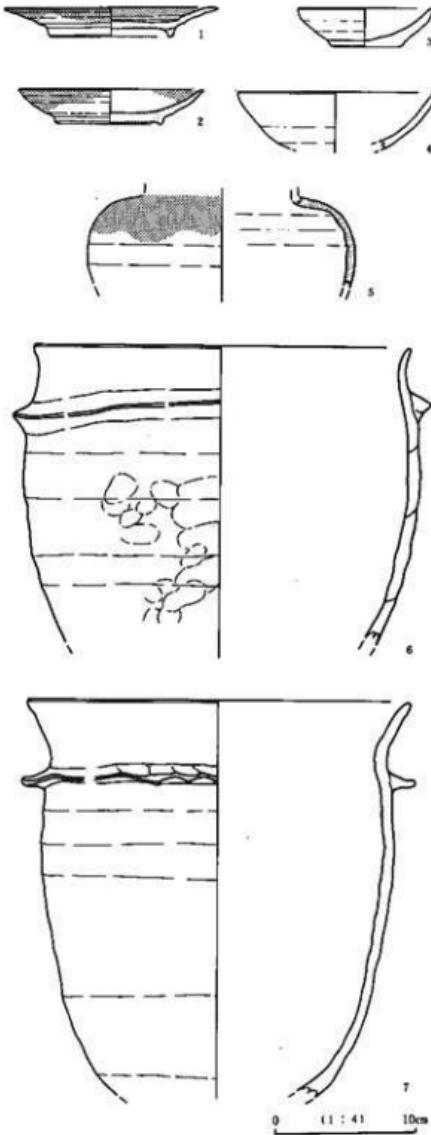
カマドは東壁中央部に位置し、住居址内より向かって左袖のほぼ全体、右袖の一部と焚き口部を調査した。煙道部に関しては調査区外となった。規模は両袖間が0.9m、焚き口部よりの長さが0.75m（推定）を測り、主軸方位はN-65°-Eを示す。形態は、天井部が崩落していて不明であるが、左・右袖ともに袖芯として河原石を使用し粘性のある土で覆い構築している。覆土は5層に分かれ、第1層が黒褐色土(10YR3/1)で径2~3cmの小石を多く含み、焼土を少量含む。第2層が黑色土(10YR2/1)でしまり粘性が弱く、焼土・炭化物を多量に含む。第3.4.5層が袖の構築土で、第3層が褐色土(10YR4/4)でしまり粘性があり、焼土を微量含む。第4層が黒褐色土(10YR3/1)で3層に比べしまり粘性があり、炭化物を微量含む。第5層が暗褐色土(10YR3/3)で4層と同じくしまり粘性があり、地山第Ⅲ層のブロックを含む。

本住居址よりの出土遺物は土師器片・須恵器片と第13図に示した遺物がある。

1は灰釉陶器の段皿であり、南西コーナーの床面上から出土した。釉は漬け掛け状を呈し、見込み部はよく磨かれており、墨の残存は確認できなかったが転用観の可能性がある。2は灰釉陶器皿で、カマド前面の床面上から出土した。釉は漬け掛け状に残存している。また、口唇部には輪花状のへこみが3ヶ所確認できる。3・4は土師器坏である。3がカマド左袖上に乗せたような状態で、4がカマド焚き口部からそれぞれ出土している。胎土はいずれも緻密であるが、4は径約2mmの赤色粒子をやや多く含む。調整は3・4ともロクロ横ナデであるが、4は本遺跡出土の土師器坏と異なり、内面に若干のミガキを施している。5は灰釉陶器の壺肩部であり、覆土中より出土した。

6・7は土師器の羽釜であり、6はカマド火床部より、7はかまど左袖内より出土している。胎土は6が緻密であり、7は径2~3mmの小石を含みやや粗い。調整は両方とも粘土の巻き上げ整形の後、指頭による整形を行い、横ナデの後、鈎を貼付している。鈎の形態は、6が器形に対して貼付の高さが一定ではなく水平にならない。7はほぼ水平と考えられるが、鈎の成形時の指頭跡が明瞭に残る。

以上、出土遺物の特徴から本住居址の所産時期は、おおむね10世紀後半と考えられる。

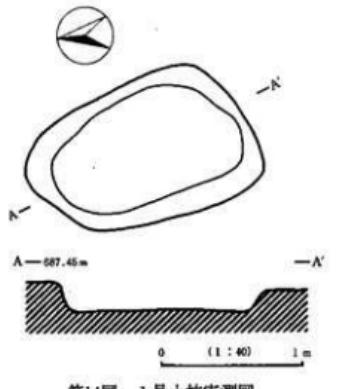


第13図 4号住居址出土遺物実測図

第2節 土坑

1) 1号土坑(第14図、図版四①)

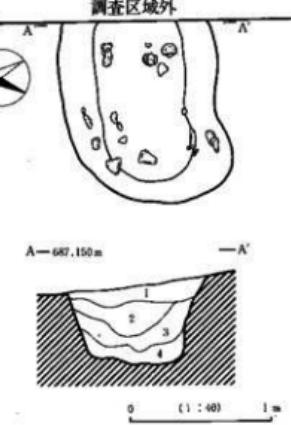
本址は調査区中央部に位置し、2号住居址と重複関係にある。新旧関係は2号住居址の項でも述べたが不明である。規模は長軸が1.55m、短軸が1m、深さが中心部で0.18mを測る。長軸方位はN-25°-Wを示す。形態は角丸の方形で、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土は単層で、黒色土(10YR2/1)と地山第Ⅲ層の混合土でしまり粘性は弱い。本址の出土遺物は須恵器壺片1点のみである。



第14図 1号土坑実測図

2) 2号土坑(第15・16図、図版四①・五①②)

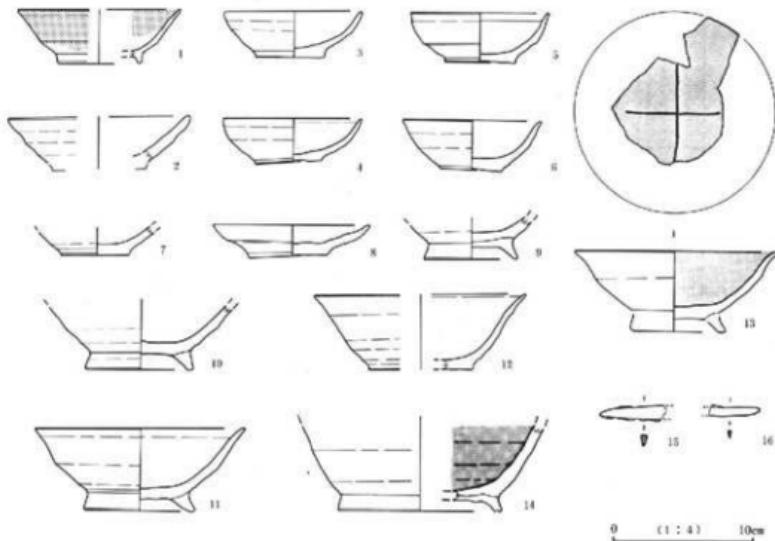
本址は調査区北側に位置する。他の遺構と重複関係はないが、東側一部が調査区外に広がっている。規模は長軸が0.8m(推定)、短軸が0.55m、深さ0.52mを測る。長軸方位はN-84°-Eを示す。形態は楕円形で、壁は下部がほぼ垂直に上部は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で地山IV層の礫が露出している。覆土は4層に分かれ、第1層が黒褐色土(10YR3/1)でしまり粘性があり、焼土・炭化物を微量含む。第2層が暗褐色土(10YR3/3)で1層よりしまり粘性があり、焼土・炭化物を多量に含む。2層中には土坑中央部寄りで厚さ2cm程の焼土堆積が確認された。第3層が暗褐色土(10YR3/3)でしまり粘性が強く、焼土・炭化物を微量含む。第4層が黒褐色土(10YR2/3)でしまり粘性は2層と同じで褐色土ブロックを含む。



第15図 2号土坑実測図

本址遺物の出土状況は図版五①②に示したように、土坑中央部に土師器壺が重なるような状態で出土し、それを不規則に囲むように拳大の河原石が検出された。また、遺物出土位置も第2層中からで3・4層からの出土はなかった。

出土遺物は、土師器・灰釉陶器・鉄製品がある。1は灰釉陶器壺で、釉は薄く残存するのみである。2~7は土師器壺で、胎土はいずれも赤色粒子を少量含み緻密であるが、2のみ特に精練

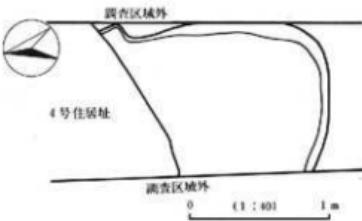


第16図 2号土坑出土遺物実測図

されており、焼成も良好である。調整は底部回転糸切り、内外面ロクロ横ナデを施している。8は土師器皿で見込み部には焼けむらがある。9～11・13は土師器輪で、成形はロクロ成形の後高台を貼付しているが、9は底部全体が貼付されており、他の輪とは製作技法が異なる。13は内面黒色処理が行われ、見込み部に「十」字の暗文が施されている。胎土は坏と酷似するが、小石の細粒が少なくより精練されている。焼成はいずれも良好である。12は土師器坏で、内面に煤が付着している。胎土は坏類と同じであるが、焼成はより良好で生焼けの須恵器の感を呈する。14は大形の土師器輪と考えられるが、高台端部の形などから壺類の可能性も考えられる。内面は黒色処理されている。15・16は鉄製品でいずれも欠損品であるが、15は刀子の柄の部分と思われる。

3) 3号土坑（第17図、図版六①）

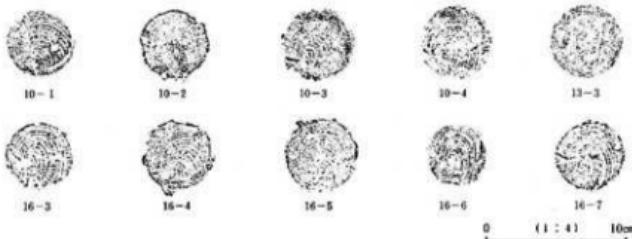
本址は調査区南端に位置し、4号住居址と重複関係にある。新旧関係は本址が古い。規模や形態は遺構の大部分が調査区外となるため不明であるが、検出値で東辺3m、南辺1.8m、深さ南東コーナー部で0.21mを測る。本址よりの出土遺物は土師器片が少量ある。



第17図 3号土坑実測図

第2表 出土土器観察表

件名 番号	器種	法 量	調 整	色 調	備 考		
8-1	灰釉陶器 残	10.8	5.4	2.1	内外面ヨクロヨコナデ 底部回転糸切りの後高台貼付	灰白色(10YR8/1)	2/3残 軸不明瞭
8-2	須恵器 高台坏	(15.7)	4.2	10.8	内外面ヨコナデ 底部回転ヘラケズリの後高台貼付	赤褐色(2.5YR4/8)	1/3残
10-1	土師器 坯	10	4.5	3.1	内外面ヨクロヨコナデ 底部回転糸切り	橙色(7.5YR6/8)	4/5残
10-2	土師器 坯	10	4.7	3	内外面ヨクロヨコナデ 底部回転糸切り	明赤褐色(5YR5/8)	4/5残
10-3	土師器 坯	10.9	4.8	2.8	内外面(ロクロ)ヨコナデ 底部回転糸切り	褐色(7.5YR4/6)	ほぼ完形
10-4	土師器 坯	11	5.5	3	内外面ヨクロヨコナデ 底部回転糸切り口縁墨黒いヨコナデ	橙色(7.5YR6/8)	完形
10-5	土師器 坯	11.2	4.8	4.2	内外面(ロクロ)ヨコナデ 底部器面欠け不明瞭	橙色(7.5YR7/4)	ほぼ完形 高台陶の可能性あり
10-6	土師器 植	14.9	6.7	6.7	内面黑色處理ミオキ外面ヨクロヨコナデ 亂刷筋糸切り後高台貼付	橙色(7.5YR6/8)	ほぼ完形 内面に暗文
13-1	灰釉陶器 残	15.1	8.8	2.1	内外面ヨクロヨコナデ 底部ヘラケズリの後高台貼付	灰白色(7.5Y6/1)	1/2残 内面よく削かれている軸は焼け剥け
13-2	灰釉陶器 壴	13	7.6	2.5	内外面ヨクロヨコナデ 底部回転糸切り高台ひねり出し?	灰白色(7.5Y8/1)	2/3残 両方に輪花軸は焼け剥け
13-3	土師器 坯	8.4	4.8	2.8	内外面ヨクロヨコナデ 底部器面欠け不明瞭	明褐色(7.5YR5/8)	ほぼ完形
13-4	土師器 坯	13.9	-	-	内面黒いミガキ外面ヨクロヨコナデ	橙色(7.5YR6/8)	1/6残
13-5	灰釉陶器 壴	-	-	-	内外面ヨコナデ外面肩部に釉	灰白色(7.5Y8/1)	肩部のみ残
13-6	土師器 羽釜	26.5	-	-	口縁部内外・外面ヨコナデ 外面ナデ後脚部貼付	褐色(10YR4/6)	1/2残 輪づみ跡を残す
13-7	土師器 羽釜	28.3	-	-	口縁部内外面ヨコナデ外縁ナデ後脚部貼付、脚部は指おさえ	赤褐色(5YR4/6)	1/3残
16-1	灰釉陶器 粉	(11.5) (5.6) (3.9)	-	-	内外面ヨクロヨコナデ 底部不明高台貼付	浅黄色(5Y7/3)	口縁1/6残
16-2	(土部質) 坯	12.9	-	-	内外面ヨクロヨコナデ	橙色(5YR7/3)	口縁1/3残
16-3	土師器 坯	9.9	4.6	3.3	内外面ヨクロヨコナデ 底部回転糸切り	にぶい褐色(5TR6/6)	1/2残
16-4	土師器 坯	9.8	4.6	3	内外面ヨクロヨコナデ 底部回転糸切り	橙色(5YR6/5)	3/4残
16-5	土師器 坯	9.9	4.9	3.5	内面ヨクロヨコナデ口縁外面に黒いヨコナデ底部回転糸切り	にぶい褐色(5TR6/6)	ほぼ完形
16-6	土師器 坯	10	4.4	3.5	内外面ヨクロヨコナデ 底部回転糸切り	にぶい褐色(5TR7/6)	ほぼ完形
16-7	土師器 坯	-	4.8	-	内外面ヨクロヨコナデ 底部回転糸切り	にぶい褐色(5TR6/6)	底部のみ残
16-8	土師器 壴	11.1	5.6	2.1	内外面ヨクロヨコナデ 底部回転糸切り	にぶい褐色(5TR5/5)	1/2残
16-9	土師器 植	-	6.5	-	内外面ヨコナデ 底部回転糸切りの後高台貼付	にぶい褐色(5TR5/5)	底部1/2残
16-10	土師器 植	-	7.5	-	内外面ヨクロヨコナデ 底部回転糸切りの後高台貼付	明赤褐色(5YR5/8)	底部一部体1/3残
16-11	土師器 植	14.8	7.7	6	内外面ヨクロヨコナデ 底部回転糸切りの後高台貼付	明赤褐色(5YR5/6)	1/2残
16-12	土師器 坯	(15.1) (7.4) (5.8)	-	-	内外面ヨクロヨコナデ 底部回転糸切り	赤褐色(5YR4/6)	1/4残 内面煤付着
16-13	土師器 植	14.4	(6.6)	(5.7)	内外面ヨクロヨコナデ 内面黑色處理底部ヨコナデ	暗赤褐色(5YR3/6)	1/4残
16-14	土師器 植?	-	11.7	-	内外面ヨコナデ 内面黑色處理底部高台貼付	赤褐色(5YR4/6)	底部1/8残 壴の可能性あり



第18図 出土土師器坏底部拓影図

第V章 調査のまとめ

今回の調査は歩道の幅であり、幅2.5m・長さ46mのいわばトレーンチ調査のような状況であった。そのために今日行なわれている集落址全体などを明らかにできる大規模な発掘調査とは異なり、調査の成果もおのずと限界があった。検出された遺構も堅穴住居址が4軒、土坑が3基、出土遺物はコンテナ1箱であり、住居址もほぼ全体像をつかめたものはわずか1軒にとどまった。

しかし、たいへん小規模な調査であったが記録保存としての成果は十分にあったと考えられる。まず1点目として、冒頭にも述べたが佐久市において今回の埋蔵文化財調査は滑津川以南の平賀地籍において初めてであり、今まで不明瞭であった中屋敷遺跡群の性格がおぼろげながら把握できたことである。従来、本遺跡は付近の表探資料や当遺跡群中に所在する城山小学校所蔵の考古資料により、弥生時代中期の大集落址ではないかと予想されていた。

今回の調査においても弥生時代を伺わせる土器片は数点出土しているが、そのいずれもが弥生時代後期であった。よって、今回の調査範囲までは弥生時代中期集落址が及んでいないことが予想できた。

そして2点目として、検出された遺構及び出土遺物は佐久平においていまだ数少ない時期の考古資料であった事である。本文中では、各遺構の所産時期を灰釉陶器の年代感によっておよそ10世紀後半と位置づけた。今日、佐久平の8世紀から10世紀前半までの土器研究はおおむね整理研究がなされ、その土器編年感が定着しつつある。

しかし、それ以後10世紀後半から11世紀・12世紀といった平安時代後期から中世への土器研究は、当該期の資料の少なさから今を不透明なままにある。今日までの研究成果としては、栗毛坂遺跡、芝宮遺跡群の南上中原・下中原遺跡、枇杷坂遺跡群の上久保田向遺跡などが上げられるが、同一遺跡内で土器の比較を行なえるのは栗毛坂遺跡のみである。このように年々資料は蓄積されつつあるものの、今後の調査研究が期待される分野である。その中にあって当遺跡の資料が今後の参考となるだろうことは大きな意義であり、調査成果であると考える。

以上、簡単ではあるが調査のまとめとしたい。

参考文献

『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 2』 水戸平A・吹付・東林・鶴ヲネ・上中原・
千草場・城の口・西林・東祢ぶた・大星古墳群・丸山古墳群・丸山Ⅱ・丸山・北山寺・
東大久保・西大久保・腰巻・栗毛坂・西赤座・中久保田・枇杷坂』
日本道路公団東京第二建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター

『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 3』 一塙尻市内その 2 - 吉田川西遺跡』
日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター

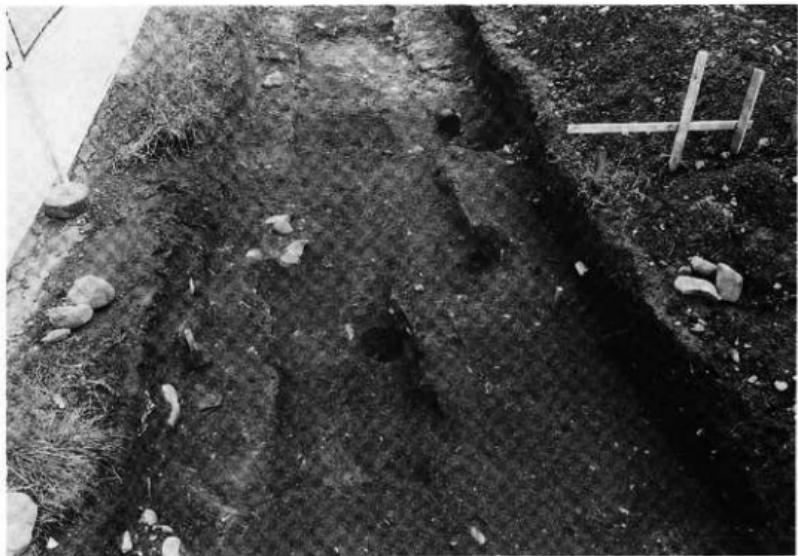
『第 5 集 前田遺跡』	御代田町教育委員会
『第 6 集 十二遺跡』	御代田町教育委員会
『第 7 集 根岸遺跡』	御代田町教育委員会
『種村遺跡 (遺構編)』	佐久市教育委員会
『第23集 南上中原・南下中原遺跡』	佐久市教育委員会
『第25集 上久保田向IV』	佐久市教育委員会
『第27集 上久保田向III』	佐久市教育委員会
『第28集 曽根新城遺跡 V』	佐久市教育委員会
『古代陶器の変遷 一信濃への流れー』	上田市立信濃国分寺資料館
『古代の土器研究 一律令的土器の様式の西・東 3 施釉陶器ー』	古代の土器研究会



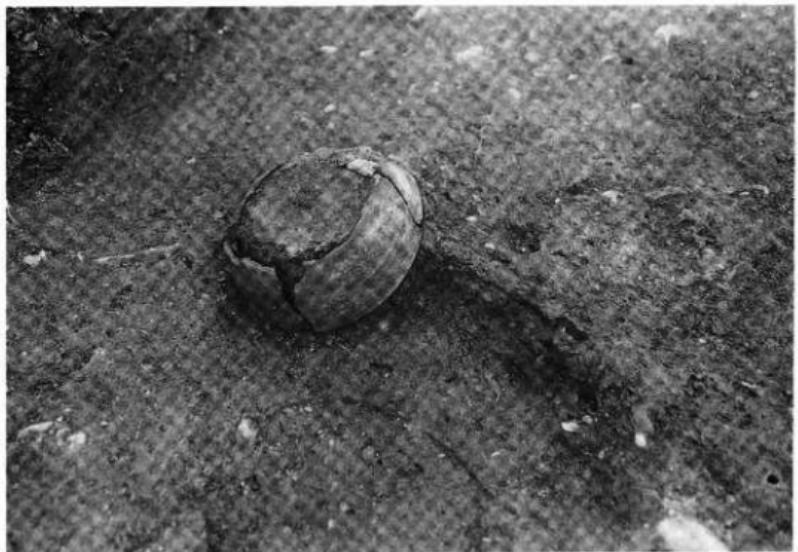
① 1号住居址（東より）



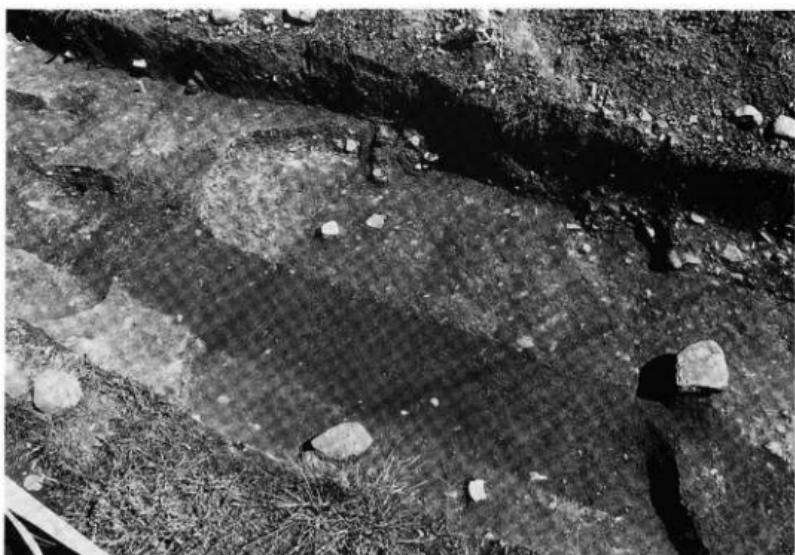
② 2号住居址（東より）



① 3号住居址（南より）



② 3号住居址出土遺物 梗と刀子（北より）



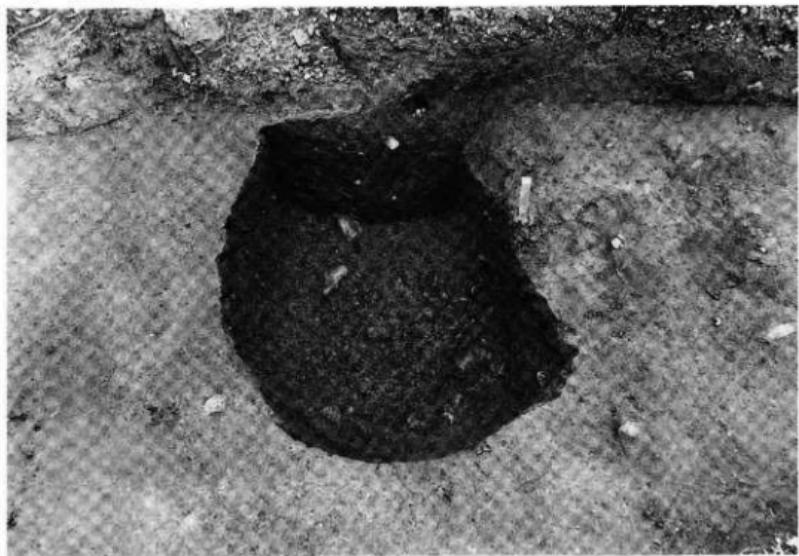
①4号住居址（西より）



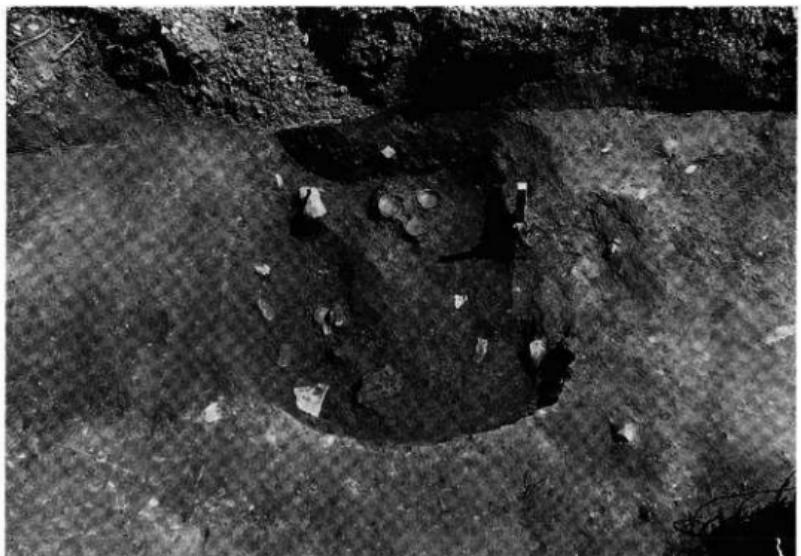
②4号住居址カマド（西より）



① 1号土坑（北より）



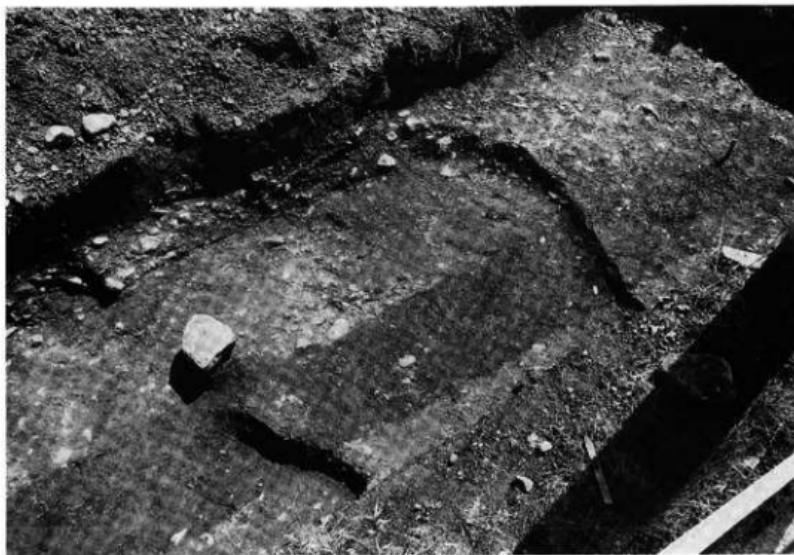
② 2号土坑（西より）



① 2号土坑遺物出土状況（西より）



② 2号土坑遺物出土状況 壺・皿（北より）



①3号土坑（北より）



②調査区南側全景（北より）

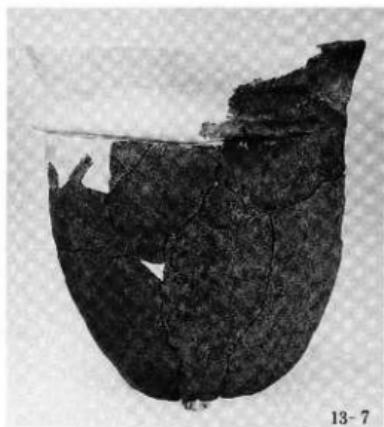


2號住居址出土遺物



10-7

3號住居址出土遺物



4號住居址出土遺物



13-1



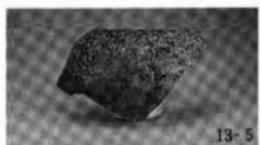
13-2



13-3



13-4



13-5



16-4



16-5



16-6



16-8



16-9



16-10



16-12



16-11



16-13



16-13



16-15



16-16

2号土坑出土遗物

佐久市埋蔵文化財調査報告書

- | | | | |
|------|------------------------------|------|-------------------|
| 第1集 | 「金井城」 | 第21集 | 「金井城Ⅱ」 |
| 第2集 | 「市内遺跡発掘調査報告書1990」 | 第22集 | 「市内遺跡発掘調査報告書1991」 |
| 第3集 | 「石附窯址群Ⅲ」 | 第23集 | 「南上中原・南下中原遺跡」 |
| 第4集 | 「大ふけ遺跡」 | 第24集 | 「上布端遺跡」 |
| 第5集 | 「立科F遺跡」 | 第25集 | 「上久保田向Ⅳ」 |
| 第6集 | 「上曾根遺跡」 | 第26集 | 「藤塚古墳群・藤冢Ⅱ」 |
| 第7集 | 「三貴畠遺跡」 | 第27集 | 「上久保田向Ⅲ」 |
| 第8集 | 「浦の下遺跡」 | 第28集 | 「曾根新城遺跡V」 |
| 第9集 | 「西田141号線関係遺跡」 | 第29集 | 「山法師B、荷村A・B遺跡」 |
| 第10集 | 「奥駒遺跡Ⅱ」 | 第30集 | 「市内遺跡発掘調査報告書1992」 |
| 第11集 | 「赤座垣外遺跡」 | 第31集 | 「山法師遺跡A」 |
| 第12集 | 「苦宮遺跡Ⅱ」 | 第32集 | 「東ノ削遺跡」 |
| 第13集 | 「上高砂遺跡」 | 第33集 | 「稻原遺跡Ⅱ」 |
| 第14集 | 「栗毛坂遺跡」 | 第34集 | 「下曾根遺跡Ⅰ」 |
| 第15集 | 「野馬久保遺跡」 | 第35集 | 「前藤郎遺跡Ⅱ」 |
| 第16集 | 「石亞城跡」 | 第36集 | 「西一本柳遺跡Ⅰ」 |
| 第17集 | 「市内遺跡発掘調査報告書1991」
(1月～3月) | 第37集 | 「西一本柳Ⅱ」 |
| 第18集 | 「西曾根遺跡」 | 第38集 | 「南下中原遺跡Ⅱ」 |
| 第19集 | 「上芝宮遺跡」 | | |
| 第20集 | 「下聖宿遺跡Ⅲ」 | | |

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第39集

平賀中屋敷遺跡群 中屋敷遺跡

長野県佐久市平賀中屋敷遺跡発掘調査報告書

1995年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

印刷所 株COX
